

経営理念		【保育目標】 自分大好き・友だち大好き・あかおかつ子 【経営目標】 保護者とながり、子どもにとって最もふさわしい生活の場としての最善を尽くす保育計画を目指す。 《子ども像》○話を聴く、話す力が身についた子ども ○好きなあそびを見つけて集中してあそぶ子ども ○ルールを理解し守る力が身についた子ども ○よりよい人間関係を作る力をもつ子ども ○五感を充分に使い、豊かな感性を身につけた子ども 《保育所像》○一人一人の子どもを大切にする保育所 ○地域を理解し保護者とともに子育てをする保育所 ○地域に愛される保育所 ○保・小・中・高の連携を大切にする保育所 ○子どもの生活日課が確立される保育所 《保育士像》○子どもとの信頼関係を大切にする保育士 ○保護者とのよりよい関係を築く保育士 ○専門性の向上に努める保育士 ○チームワークを大切にする保育士					
中期経営目標		短期経営目標 (評価項目)	自己評価		保育所関係者評価		改善策等
			達成状況		評価	評価	
①保育・教育活動の充実	一人一人の心が満たされ、意欲的に遊びや生活をするための保育者の援助と環境構成を行う。	子ども達の経験を支える豊かな遊び環境の保障に努める。	・今年は目標の達成に向けて計画的に教材研修に取組み、園内研修では年間3回実施することができた。若年保育士は教材研修への取組み方を初めて知る機会となり、個人でも実践してみようという意思をもつことができた。担任以外の職員も若年のクラス担任に遊びの提案をしたり、遊び場や玩具の掃除や整理をしたりすることで、環境を意識して整えていくことができた。 ・取組の成果としては「ものとの関わりを深めるような教材の研究をするようになった。」と答えた職員が3分の2、「遊びの中でものとの関わりを深めるような教材を研究し、作る等の取組をするようになった。」まで成果を出すことができた職員は3分の1であった。		B	発達に応じた玩具の提供ができるように、玩具で育つ力についても研鑽していった欲しい。	B 次年度は知育玩具にも視点を当て、遊びの質向上につながる教材研究を組織的・計画的に行っていく。
		子どもの姿を見取り、確かな成長を促す指導の工夫を図る。	・今年エッセンスQを用いた子ども理解の研修を年間18回実施した。1日に2～3名を対象とし、子どもの行動を観察し個に応じた必要な支援を協議し合った。THは6回コースを4名の職員が受講した。継続した取組により「個と集団の育ちを意識して一人一人の特性や発達を踏まえ、必要な援助を行うようになった。」という段階まで支援を行えた職員が多かった。 ・保護者による保育所アンケート「保育所はお子さんの個性や特性を捉えて成長を促すための工夫した関わりができていますか」の設問には「よくできている。」が85％の評価であった。		B	日頃から保育者と子ども達がよく遊んでいる。行事前であっても、そこにとらわれず日常の保育が展開できている。	B 次年度も継続して研修に参加し、専門性のスキル向上を目指す。そして1つの専門的な立場からだけでなく複数の視点をもち子ども理解をし、一人一人に応じた関わりに努める。
		食育活動を通して、食を楽しむ為の生活経験の充実を図る。	・食に関わる体験を積み重ね食を楽しむことができるよう、年間計画の中に栽培活動を位置付け実践を行うことができた。又、幼児は「給食のメニュー紹介を機にいろいろな食材に親しむことができるよう話題を作る。」乳児は「いろいろな食べ物を見る、触れる、噛んで味わう体験をする。」や各年齢とも「毎日の食事を楽しみにできる保育環境の準備をすることを意識して取組む」ことができた。今年は給食展示場所の環境構成に取組み、展示場所を保護者の目に触れやすい場所へと移動したり、給食のメニューに出てくる食材を写真や絵でボードに表示したりして改善をしていた。 ・保育所アンケートの設問「保育所は食を楽しむために生活経験や食育活動が充実していると思いますか」では「そう思う。ややそう思う。」が99％であった。園としては、幼児は「食に関わる体験を増やし、食を楽しむ子ども」、乳児は「お腹がすくりズムをつけて食事を楽しむ子ども」を目指し、取組結果としてはクラスの60％以上が達成することができた。		A	畑だけでなく、園庭でもプランターやミニ花壇に上手に栽培活動ができている。日頃から育てているため、関心も強い。以前は乳児クラスで子ども達の目の前で食材の皮を剥いたり、切ったりしていた。可能な範囲でそういった体験の機会をもち、子どもの反応を楽しむことができる感性を磨いていった欲しい。	A 5歳児でもトイレでの排便が難しく我慢をしてしまったり、排便のコントロールが難しい子どももいる為、次年度は「朝うんち」の取組を通して、基本的な生活習慣を身につけていく。今後も保護者のニーズに答えることができる部分は積極的に取組んでいく。
②職員の資質向上や運営	職員が互いの良さを認め合い、協働して保育を遂行する職場環境を作る。	職員間の協働性を意識し、主体的に学び合う環境を整える。	・今年度は保育を語り合える職員の関係づくりに取組み、クラス内の話し合いを「週3回のペースで行ってきた」年齢と、「毎日行うことができた」年齢とに分かれた。異年齢間の話し合いは「月3回できた」年齢と、「月4回以上行えた」年齢に分かれた。フリー担当や家庭支援推進保育士は、乳児・幼児の月1のカリキュラム会には必ず参加し、代替としてクラスに入った時には疑問や気付きを伝えたり、自分の考えも担任に伝えたりすることができた。 ・成果として自分から積極的に他の職員と協力ができるようになった職員が過半数であった。若年保育士の中には、経験年数の少なから自信がもてず、積極的に動けなかった職員もいた。子どもを中心にして意見を交わし合うことはできても、周りの反応を受けて「やっぱり言わなかったほうがよかった」と思った職員もいたことから、個人の意識の持ちようをプラス思考にもっていくことが今後の課題である。		B	保育士不足の中、保育サービスと保育・教育の質向上のどちらもが求められている。日中と延長保育の職員間の引継ぎでは、個人の意識で受け止められることもあり、円滑な引継ぎを行うことは難しさもあると感じる。職員が自分のしんどさを言葉にできる環境であることは、良いことである。	B 一人一人がやりがいを持ち、職員が互いの良さを認め合い、仲間と協働して保育を遂行していく職場作りに努める。すぐるの活用等、業務内容の軽減につながる工夫を行う。
		職員相互のコミュニケーションを図り、円滑な人間関係を築く。	・日勤の職員と延長保育担当職員との連携強化を意識し、人間関係の基本となる ①互いに気持ち良い挨拶を交わし合う。②必要に応じて連絡ノートを活用していく。③週1回以上は子どもの様子を語り合う。④組織力が発揮されるように毎日必要な情報の共有を行う。に取組み4項目中3項目については、全員が実践することができた。延長保育担当職員に対しては、保育内容の共有が図られていくよう、外部講師を招き学びの機会を年5回保障し、子ども理解や保護者対応、不審者対応、人権感覚、意識の向上に努めた。 ・パート職員とは、その日の子どもの様子や体調面に関しては意識して行えるようになってきた。しかし日中の保育内容を延長保育担当職員に詳しく説明することが難しく、遊びのルールが日中と違っていることが原因で、いざこざになることもあった。又、日勤の職員の子どもへの関わり方をパート職員に支援の共有として具体的に引継いだとしても、実践は難しかった。		B	延長保育の時間帯は、子どもに寄り添い一緒に遊ぶことができている職員と、安全面への配慮を重視し見守り型になっている職員がいる。遊びを仕掛けている力、保育のコツを伝えていく事が必要である。	B 職員の職務内容等を踏まえた研修の機会を保障していく。そこで得た内容を日々の保育で有効に生かすことができるよう、資質や能力、適性、経験等に応じた人材配置に努める。
③地域に関わられた園づくり	地域の関係機関と連携及び協力して、子育て、家庭支援の充実に努める。	組織として保護者を支援できる体制を整える。	・親育ち支援力の向上を意識し、①毎月のクラス別ケース会の実施 ②親育ち支援に関する研修への参加、研修の学びを職員間で共有 ③毎日【保育所での見守りチェックポイント】を活用し、子どもの状態を確認する。④関係機関との連携・ケース会への参加。の4項目を意識して取組み、その結果「子どもの悩みを相談してくれるようになった」保護者はクラスの70％以上と職員は受け止めている。 ・外国籍の家庭が子育てに関する情報収集で不利益を被らないよう、毎日の連絡帳やお便りの配布については気を配っていたが、徹底はできず配慮不足となる一面があった。 ・昨年度のアンケートの中で「日頃の子育ての悩みや困ったことを相談したい時、職員に相談できますか」の設問に対し3％が「あまりでない」という評価であった。今年は常に誠実な対応に心がけていくようにしたが、今年も「日頃の子育ての悩みや困ったことを相談したい時、職員に相談できますか。できませんか。」の2択の設問では2名の保護者ができないという評価であった。又、アンケートの自由記述より、子どもへの関わり方で改善を求める意見があり、ここへの考察や今後の自分達の姿勢については皆で振り返りを行い、確認し合った。		B	全ての保護者さんが満足する対応をしていくことは難しい。過剰なサービスとならないように若年保育士には、保護者との距離の取り方やコミュニケーションのコツを指導していくことが必要である。	B 保護者は、我が子が乳児期の頃は、園生活の様子を細かく知りたいという気持ちが強い。そういったニーズに答えることができるよう発信の工夫等、積極的に取組んでいく。
		様々な園行事を通して保護者とともに歩む教育活動の充実に努める。	・今年は保護者の子育てに役立つ情報の発信に努め、参観日には各年齢が外部講師による講話や演習等を行うことができた。保育所アンケートの設問「講師を招いての講話等の情報は家庭の子育てに役立つものだったか」では「そう思う・ややそう思う」が96％「行事は工夫され参加しやすいものとなっていますか？」の設問には「そう思う。ややそう思う。」が96％の評価「様々な行事からおさんが楽しんで活動する姿や成長を感じることはできていますか」の設問には「そう思う。ややそう思う」が97％の評価であった。新たな取組として、一日保育士体験を実施し、参加者が50％となるよう呼び掛けていったが、30％どまりであった。しかし体験後の感想では、半数の保護者が「大変であったが楽しかった。来年もやってみたい。」という評価であった。		A	行事の参加人数の制限がなくなったことで、保護者としてはとてもありがたかった。	A 一日保育士体験のメリットをアピールし参加者を増やし、保育所と保護者の相互理解や保育・教育の質向上にさらに努めていく。